

緑豊かな土地に移って…

田中章代

長野県・二二一・大学生

冬、生き物が死に絶えたかのようなこの季節が近づくと、あなたを思い出します。薄暗い東京の路地、人もあまり通らない所で一軒寂しそうに、だけど異次元の猛々しい明りを放つ、夜のコンビニの前を何げなく通り過ぎるあなたのシルエツトが、一枚のスナップ写真のように、私の心よみがえります。はじめはあなたへの思いを思い出として内に秘めていよう、とも思いましたが、最近つらくなってきたてしまい、今この手紙を書く事で、あなたを忘れ新たな人生をつき進みたいと思っています。

最初、授業が終わって携帯電話を片手にさっさと帰ってしまうあなたを、無我夢中で追いかけて、私が話しかけたのよね。その時、あなたはひどくびっくりして顔を引きつけていました。無理もないよね、見知らぬ女が声をかけてきたんだもの。その後も何度かいっしょに帰ってくれてうれしかったです、あなたの優しさが。

あなたが自分の弟や妹について話してくれたことも覚えています。私が一人っ子だからとても新鮮だった。

二人で話しながら帰る途中、行き交う人の事など全然目に入らなかつた。でもあなたの顔の表情、笑顔、雰囲気は目に焼きついてしまっています。あなたはすごく透明感のある人で、私にとっては触れたら暗闇に消えてしまいそうな大人の天使でした。

駅に着いたら何組かのカップルがキスをしていて、そこをあなたといっしょに通り過ぎるのがとても恥ずかしかつた。あのカップルが私達だったら、とも思った。

あなたが好きだったとか、もう忘れたいとか、自分勝手なことばかり書いてごめんなさい。でも、これが、あなたに気持ちを伝えることが出来ず、「無念」という言葉を引かずって生きてきた私のけじめのつけ方です。ありがとう。そしてお幸せに。

*私と彼は予備校で出会いました。彼の事が好きで、告白したいと思いましたが、大学受験の直前だったのであきらめ、受験後、会ったら告白しようと思っていました。がその後、彼は塾に来ることもなく、会う機会がなくなってしまったのです。